

# イギリス君主制(王室)の〈姿〉に関する一考察

## —王室儀礼における〈公〉と〈私〉の観点から—

吉田 知准

本稿は、王室儀礼における現代のイギリス君主制(王室)の〈公的性〉と〈私的性〉の在りようを検証し、その 2 つを兼ね備えるその〈姿〉について検討・考察することを目的としている。今日のイギリス君主制(王室)を支えるのは、好意的なイメージに基づく国民の支持と合意であり、そのイメージは〈公的〉なものとして〈私的〉なものとして 2 つを有している。神秘性や権威性といった伝統的要素に表象される〈公的〉なイメージに対し、〈私的〉なイメージは、近代形成期以降に確立・発展されてきた『ロイヤル・ファミリー』というひとつのシステムによって表象されている。まさに今日のイギリス君主制(王室)は、公的領域と私的領域の境界線を横断しているのである。そしてそれは、ヴィクトリア女王の治世に始まる近代形成期以降、イギリス君主制(王室)のその〈公的〉なイメージと〈私的〉なイメージの境界線が次第に融解してきたことで可能とせしめられているのである。

第 1 章で論じているように、王室儀礼はこれまで、イギリス君主制(王室)が自らの時代理念をそこに反映させることで、その時代の〈姿〉を表象する場として機能してきた。19 世紀後半から 20 世紀にかけて「新しい伝統」が次々に創造され、組み込まれることで、近現代の王室儀礼は意図的に変革されてきた。ひいてはイギリス君主制(王室)が次第に政治的権力から離れ「弱体化」していくに伴い、王室儀礼はかつてのようなイギリス君主制(王室)の絶対的権力を表象するものから、「帝国の祭典」を印象付ける華やかな「スペクタクル」として再創造され、国民の了解の獲得に務めてきたのである。その系譜として、今日のイギリス君主制(王室)はこれまでに、王室儀礼という強固な基盤において「君臨すれども統治せず」の精神をまことに具現化することに成功しているのである。

第 2 章では、近現代形成期以降のイギリス君主制(王室)に特徴付けられる、『ロイヤル・ファミリー』というその〈私的性〉を象徴する近代的なシステムがこれまでいかにして確立・発展せしめ

られてきたかについて論じている。ヴィクトリア女王が夫や子供たちとともに度々メディアを通じて姿を現したことで、そこには『ロイヤル・ファミリー』という理想の「近代的な家族像」が創造され、かつ「妻」や「母」といった家庭人としてのイメージが高められることで、ここに「君主の私人化」が進んだのである。以降のイギリス君主制(王室)は、「理想の家族像」として、はたまた「道徳的観念」の象徴として『ロイヤル・ファミリー』の創造に務めてきた。しかしながら 20 世紀末には、その『ロイヤル・ファミリー』の崩壊を目撃することとなった。その危機に対して、自らの復活を「王室儀礼」や「公務」といった公的領域に求めた。いまやイギリス君主制(王室)に課された「責務」のひとつでもある「私的性」の表象は、公的領域においてこそ成される必要があるのである。

以上を踏まえ、第 3 章では、近年で最もイギリス君主制(王室)の「姿」を表象したといえる、2012 年の『ダイヤモンド・ジュビリー』(即位 60 周年記念式典)を対象に、長らくイギリス君主制(王室)の「姿」を伝え続けてきたイギリスの新聞 3 紙 *The Guardian(The Observer)*、*The Times(The Sunday Times)*、*The Daily Telegraph(The Sunday Telegraph)* において、イギリス君主制(王室)の「公的性」と「私的性」がいかに関与しているかを検証することで、今日の君主制(王室)のいかなる「姿」が表象されているかについて検討・考察を実施した。その結果、この王室儀礼においては、国家や大衆をその主役に添えた、君主制(王室)と国民国家とによる相互補完的な関係性が提示された。君主制(王室)が「イギリス・ナショナルなもの」あるいは「ブリティッシュネス」の象徴として表象され、それはまたイギリス・アイデンティティの拠りどころとなっていると考えられる。そしてこの王室儀礼においても『ロイヤル・ファミリー』による「私的性」の表象がみられた。エリザベス女王の夫フィリップ殿下を見舞ったハプニングを経て『ロイヤル・ファミリー』は「理想の家族」をパフォーマンスした。『ロイヤル・ファミリー』という近代的システムが、「私的なもの」の象徴として偶像化されることで、大衆の要望に的確に答えてきたといえる。しかし、この王室儀礼におけるイギリス君主制(王室)は、いくばくか「控えめ」な振る舞いであった。これまでの王室儀礼に見られた特徴とは異なり、最小限の『ロイヤル・ファミリー』によってパフォーマンスが構成された。その姿は、イギリス君主制(王室)の「現在」から「未来」への転換であり、未来の君主制(王室)が担っていく「姿」であると考察されたのである。

第 4 章ではこれまでの議論における結論としている。このイギリス君主制(王室)による統治と君主の生涯を祝うこの王室儀礼を通じて提示されたのは、意図的に「簡略化」された「姿」であったといえる。それは、今日のイギリス君主制(王室)が有し得ている本質的な象徴的機能を維持しながらも、これまで過剰に表象されてきたものを最小限に留めることを意図した「姿」であるともいえる。王室儀礼という公的領域において、君主制(王室)という「公的」なもの象徴性と、『ロイヤル・ファミリー』という「私的なもの」の象徴性との融合を絶対的な基盤として、そこに慈善や仁

愛の精神の提供という実用的な機能を発揮しているのである。すなわち、今日のイギリス君主制(王室)は、象徴的要素と実用的要素の均衡を図ることで、国民国家の要望に的確に応えることに成功しているといえるのである。最後になるが、本稿にみる成果は、イギリス君主制(王室)の築き上げてきた歴史の断片を切り取ったにすぎない。今後も変化し続けていくその〈姿〉を継続的に見ていく必要があることを今後の課題として定め、本稿を締め括りたい。